

第4講 文と文の接続 (5/7)

作成：田中重人 (東北大学文学部准教授)

[今回のテーマ] パラグラフの配列とその内部の文章を校正する

1 中間レポートについて

課題： 本・雑誌記事などを選び、それについて批評を書く

次の2点をふくんでいなければならない：

- (1) 概要の紹介: 素材に書いてあることをまとめる。読んでいない人にもわかるように。一部だけの紹介でもよいが、その場合はそのことを明記する。
- (2) 批判: データに照らして、または論理的に。

コンピュータで作成し、印刷したものを 5/28 授業時に2部提出。
様式は、配布する見本を参考にすること。重要な点は次の通り。

- A4用紙を使い、縦置き、横書きとする
- 上下左右の余白を 2cm ~ 3cm あける
- 分量は2ページ以上
- 左上をホチキス止め
- 各ページの下端中央にページ番号をいれる
- 最初のページの上端に、種別、日付、表題、氏名、所属を書く
- 表題は、とりあげた素材の書誌情報がわかるようなものにする
- 適当なセクションに分割すること。各セクションには見出しと番号をつける。
- 素材から引用する場合にはページ数 (またはセクションの番号など) を明記
- 他の文献を参照するときも出典を明記すること

次回 (5/14) までの宿題: 各自が選んだ素材と、その素材をどういう観点から取り上げるかについて、簡単に説明する (A4用紙1枚)。他の受講者が読むことを考慮して素材を選ぶこと。

2 今回の課題

宿題を交換して、互いにコメントする。

- 前回の相手とはちがう人で、自分のとは違うテーマで書いている人と交換すること
- まず、内容を読んで、気づいたことを書き込む
- わからないところ、直したほうがよいところについて、話し合ってみる

コメントは、「そのことばを聞いたことはあって、意味がぼんやりわかるが、くわしくはわからない」という人の立場を想定しておこなうこと。特に、情報の過不足、トピックの選び方のバランスに注意する。それ以外の点でも、気づいたことはすべて伝えること。

気づいたことを書き込む際は、校正記号(教科書 p. 171)を参考にするとよい。書き込む内容によって、ペンを使い分ける。

[訂正] 確実にまちがいであるもの

赤ペンで訂正する

[改善提案] まちがいとは言い切れないが、「こうなおしたほうがよい」という個所

その他の色ペンで

[コメント] 内容がよくわからない個所、訂正の仕方がひとつおりに絞れないもの

黒ペン / 鉛筆 / シャープペンシルで

つぎの校正記号は、特に覚えておいたほうがよいもの：

- 「トル」
- 訂正 / 挿入
- 「イキ」
- パラグラフを分割する / くっつける (追い込み)
- 文章の前後を入れ替える

くわしくはつぎの本を参照：

- 日本エディタースクール (1998) 『新編 校正技術』(上下巻) 日本エディタースクール出版部.
- 日本エディタースクール (2000) 『実例 校正教室』 日本エディタースクール出版部.

その他のチェック・リスト：

- 想定読者の立場から見て、情報はじゅうぶんか
- 誤字・誤変換はないか
- 用語・表記が統一されているか
- 漢字で書くべきことばやひらがなで書くべきことば
- 文法上のあやまりはないか
- 句読点や括弧の使いかたは適切か
- 文を分割したほうがよいところはないか
- パラグラフの最初は改行して1字下げできているか
- トピック・センテンスの位置は適切か
- パラグラフの区切り方は適切か。もっと細かく分けるべきところ、逆にまとめるべきところはないか。
- パラグラフをならべる順序は適切か

- わかりにくい表現、あいまいな表現はないか
- 議論が飛躍しているところはないか
- とってしまったほうが意味がはっきりするようなことばはないか
- 指示語の指示対象は明確か
- 文章のどことどこがどう関連しているかがはっきりしているか
- 印刷レイアウト、余白、行間、文字種類など

3 パラグラフの内部構造

トピック・センテンス (topic sentence): そのパラグラフのトピックについて概論的に述べた文 (教科書 p.62)。
ひとつのパラグラフにひとつおく。

展開部: トピックに関連する情報について述べた文の集合 (教科書 p. 68)。

トピック・センテンスは読み手に解釈枠組み (schema) をあたえるという点で、セクション見出しとおなじ機能を持つ。だから、パラグラフ冒頭におくのが原則である。しかし、「話題転換」や「予備知識」などの関連情報を先に示しておかなければならない場合は、パラグラフ冒頭にトピック・センテンスをおくことができない。その場合には、

- パラグラフの2番目の文
- パラグラフの最後の文

のどちらかにおく。これら以外の場所においてはならない。

4 文をつなぐ表現

文と文のつなぎかたにはさまざまなものがある。種々比較して、最適のものを選ぶこと。

- 論理的帰結: したがって、だから、すると、ゆえに、よって、以上のことから、そうとすれば...
- 動機: そこで、この目的のために、だから...
- 実際の結果: このために、そのため、結果として、こうして、結局、だから...
- 理由・原因: なぜなら、というのは、なるとなれば... / ...のだ。...からだ。
- 逆接: しかし、だが、ところが、にもかかわらず、とはいえ...
- 並列: かつ、また、同時に、そして...
- 対照: 一方、他方、逆に、これに対して...
- 類似: また、同様に、加えて、さらに...
- 留保: ただ、ただし、例外として...
- 例示: たとえば、～を例にとると... / すなわち... など
- 言い換え・要約: つまり、すなわち、いいかえると、換言すると、要するに... / ...のだ。...ということになる。
- 途中を省略: つまるところ、端的にいえば、一言でいうと、結局、要するに...
- 再確認: すでにみたように、上述のとおり...
- 焦点集中: 特に、なかでも、とりわけ...
- 情報追加: さらに、それだけでなく、このほか、なお...
- 仮定・条件: もし～なら...、～という条件のもとでは...

- 話題転換: さて, ところで, では, つぎに...
- 順を追った説明: まず... つぎに... / 第1に... 第2に... 第3に... / ...そして, さらに /

文が自然に流れている場合には、つなぐためのことばはなくてもよい場合も多い。

5 宿題

- (1) 今日もらったコメントに基づいて、パラグラフを書き直す
- (2) どこをどう書き直したか、またコメントがどのように役立ったかをまとめる
- (3) 自分がコメントする立場に立ってみての感想をまとめる

コンピュータで作成して、印刷すること。A4判用紙の表のみを使う。全ての用紙の上端に番号と氏名を書き、綴じないで次回提出。

もらったコメントについてはすべて検討すること。ただし、すべてを受容しなければならないということではないので、判断は自分でおこなうこと。

これとは別に、中間レポートの構想(上述)も作成して提出。

また、次回授業の予習として、

- 教科書の第5章「文の構造と文章の流れ」を読んでおく
- 「文節」「係り受け」「重文」について調べておく